

公開フォーラム「医療消費者と薬剤疫学」

日時:平成21年8月15日 13:00~18:00

場所:東京大学薬学部講堂

座長:中山健夫(京大大学院教授:健康情報)

演題:薬剤疫学への期待

- (1) 水口真寿美(薬害オンブズパーソン会議事務局長)
- (2) 高木昭午(毎日新聞筑波支局長)

【報告】

2009年8月15日(土)午後(13:00~18:00)東大薬学部講堂にて、公開フォーラム「医療消費者と薬剤疫学」を開催した。薬剤疫学という学問は一般の人々にはかなり分かりづらい分野の一つである。そこで、公開フォーラムを企画するにあたって、一般市民と薬剤疫学会の橋渡し役として、水口真寿美氏(薬害オンブズパーソン会議事務局長; 弁護士)と高木昭午氏(毎日新聞つくば支局長; 記者)に講演をお願いした。副作用被害の報道や訴訟との関わりで、疫学的な論議に接する機会が多いのはジャーナリストと弁護士であり、その中でも特に薬剤疫学に深い関心と理解をお持ちのお二人に、薬剤疫学への期待を語って頂くことにした。

座長は中山健夫氏(京大大学院教授; 健康情報学)にお引き受け頂き、講演に先立って30分ほど薬剤疫学に関する基本的な解説をお願いした。

水口真寿美氏は、薬害エイズ訴訟・薬害肝炎訴訟・薬害イレッサ訴訟などに関わり、薬害オンブズパーソン会議事務局長として、さらにまた最近では、薬害肝炎検証会議の委員としてさまざまな薬害事件と取り組んできた体験から、薬剤疫学に対する期待を語り、問題点の指摘を行った。

高木昭午氏はNSAIDs、コレステロール低下剤、タミフル、イレッサ、ジェネリック薬問題などを報道した体験から感じた疑問を語り、薬剤疫学会は専門家集団として社会に積極的に発言したり、日常的な啓発活動を行って欲しいという期待を語った。

講演後15分ほどの休憩を挟んで、聴衆と演者間での自由討議が約2時間あり、活発な意見の交換が行われた。

出席者は全部で32名(内訳:大学・学会関係8名、企業7名、医療関係7名、一般市民5名、ジャーナリスト2名、他3名)であった。今回は一般市民への呼びかけに時間がなく、参加者が少なかったため、次回フォーラムでは広報の手段についても検討する必要がある。

講演と質疑応答に関しては、各演者に要約の執筆をお願いし、後日講演録として学会誌などに発表することを考えている。